令和４年度第２回 旧国立駅舎運営連絡会議事録（要旨）

日　時：令和４年７月20日（水）19時00分～21時00分
場　所：国立市役所３階　第１、第２会議室
出席委員：秋田委員、礒部委員、落合委員、木村委員、佐藤委員、鈴木委員、中村委員、
　　洪委員、藤田委員、宮﨑委員
欠席委員：藤本委員、
事務局：国立駅周辺整備課　関野課長、外立係長、菱沼主査、藤堂主任、後藤主任
　　道路交通課整備係　和田係長

〇鈴木会長　本日はお集まりいただきまして、ありがとうございます。今年度の第２回の旧国立駅舎運営連絡会ということでやらせていただきたいと思います。今年度４回予定されているうちの２回目ということで、今日でもう半分ですけれども、今年度の残りの期間、連絡会としてどんなことができるかということを検討していくような会になればいいかなと思っております。

本日はお二方、ゲストをお迎えしております。最初にご紹介させていただこうかなと思うのですが、お一方、髙野宏さん。後ほど、詳しくはご紹介があると思いますが、有志グループで、町なかで結婚式をするとか、いろいろなお仕事をされているということで楽しみです。それからもうお一方が、松川創さんです。ご職業は指揮者をされているということですが、国立を音楽のまちにしようということで活動されているということで、後ほど詳しくお話しいただきたいと思います。本日はよろしくお願いいたします。

それでは次第に従って、まずは旧国立駅舎運営状況について、ご報告をお願いいたします。

～事務局より、「【資料1】利活用リポートVol.11」のとおり説明があった。

〇事務局　すみません、続きまして、旧国立駅舎の指定管理者制度に関するところで、皆さんに報告させていただきたいことがございます。もともと駅舎の指定管理者制度については、従前から課題になっていたところでございます。このたび市役所の庁内で指定管理者制度の導入を検討していく組織体を立ち上げました。旧国立駅舎指定管理者選定検討部会という名前の組織体になるのですけれども、まず、この検討部会を立ち上げましたというご報告が１つです。

この検討部会は、指定管理者に求める基準の検討ですとか、契約内容である仕様書の内容の検討ですとか、導入手法を公募するパターンなのか、それとも特定型といわれる、何か指名をするような形でやっていくのか、あとは選定候補先の検討。公募の場合は応募資格の検討などをやっていきます。ただし、この検討部会というのは決定機関ではございません。検討の結果を市長、副市長、教育長、市の部長職で構成される行財政健全化推進本部会議という庁内の組織体に報告をして、さらにその上の指定管理者選定委員会という有識者を交えた機関で審査されて、最終的に方向性が決定されるという流れになっております。こういった会議体を、組織を立ち上げました。

その部会のメンバーなのですけれども、基本的には幹事課である、我々国立駅周辺整備課の職員と、あとは関連部署の、まちの振興課、それから生涯学習課という部署のメンバーでやっております。その中で、市民目線、利用者目線を導入すべきという視点がございまして、市民委員さんを１名迎えることになったのですけれども、実はこの旧国立駅舎運営連絡会のメンバーでいらっしゃる洪さんに打診をさせていただきまして、メンバーになっていただくことになりました。利用者目線ということで、洪さんは駅舎をイベントの主催者という形で使っていただいたこともございますし、あとは立川の施設のほうで、指定管理者という形で施設の運営に携わっているところもありますので、そういった観点から洪さんのほうを事務局としては指名させていただいて、お招き入れるという形になりましたので報告させていただきます。以上でございます。

○鈴木会長　後藤さん、ありがとうございます。改めまして菱沼さん、ありがとうございました。もう丸３年ですかね。

○事務局　９月末でちょうど３年です。

○鈴木会長　そうですよね。最初の連絡会を立ち上げ前の日から、たくさんお話をさせていただいて、今日でこの菱沼さんのヒシヌマ節というのですかね。最後かと思ってちょっとしみじみ聞かせていただきましたけれども、後藤さんとのコラボが、ちょうど受け渡すところなのだろうなというところが、非常に心に迫るものがあったりしましたけれども、本当に３年間ありがとうございました。今回のご報告もさすがのラインナップだったなと思って、改めて菱沼さんの存在の大きさを感じました。

落合さん、突然振ってあれですが、またイベントをされて、５月に。いかがでしたか。

○落合委員　コトナハウスというシェアハウスの、さっきご紹介いただいた、粘土で作った、駅舎の形を模したおかしの家の展示を５日間と、小鳥書房主催の本祭りという、本屋さんを招いたイベントを１日させていただきました。駅舎の形を模したおかしの家、すごくかわいくできまして、見てくださった方もいたかもしれないのですが、子どもたちに遊んでいただいて、すごくいい時間になりました。コトナハウスのメンバーも私たちも、本当に駅舎でこれを展示するのが念願だったので、実現してうれしいです。菱沼さんが本当に細かくやり取りしてくださって、いろいろなご提案をくださったおかげで、いい形になったイベントだったかなと思います。

本祭りのほうは、奥の展示室の扉を開けていただいてというのと、木製の改札のスペースにスピーカーの方に立っていただいたとりと駅舎の利用の方法としては新しいところかなと思うのですが、展示室のほうを開けて、そちらのほうに３店舗、本屋さんのブースを作ったのですが、売上としてはやはりホールのほうの４店舗のほうが格段にありました。ただ、一概に場所がいいとも思えなくて、販売している本の中身とか展示の方法とかも、ホール組の４店舗のほうが気合が入っていたので。一概には言えないのですけれども、売上はかなり違いがありました。２倍、３倍くらい差が出た本屋さん同士もあったので、毎年続けていきたいと思っているのですが、お店の配置の仕方は、ちょっと考える必要があるなと思いました。

○鈴木会長　ありがとうございます。詳細に様子を教えていただいて。切符を切るところに立って話すのは、いいですよね。よく考えたなと思っていました。

それでは、今回のご報告、ありがとうございました。先に進みたいと思います。

「前回会議の振り返りと今後の予定について」。もう１０分押しています、すみません。こちら、外立さんから、お願いいたします。資料２ですね。

○事務局　資料２になるのですけれども、先生、その前に宮﨑さんが今回活動されているということ

で、ちょっとご報告だけ。
○鈴木会長　この青い紙を御覧ください。夏休みの学習スペース。
○宮﨑委員　ありがとうございます。お時間をとっていただいて。この運営委員会に携わらせていただいたのがご縁で、子どもがちょうど小学校に入っているのですが、コロナでいろいろと活動ができなくなっている中、国立市は常に子どもの居場所を確保してくださっていたのです。
　そんな中で、いつも子ども食堂とか、タイトルがあったのですが、こういうチラシが小中学生等に配られているのですけれども、これが駅舎のほうでもやっていらしたということを聞いて、パッと見たときに、私の住む北エリアに何も活動がなかったのですね。ないなら作ってしまえというのが、私もここに来て、いろいろな活動を皆さんとつながりができたことによりまして、このたび立東キャンプ、立川の東ということで立東という地名が残っているのですが、立東キャンプという名前で、本当に、何だか不思議なことに、パパパッとママたちが集まって、６人ぐらいのママがぱっと集まったので、わずか１週間で助成金を申請したら、プレゼンで、私、口だけは達者なので、９団中４位だったのです。
　それで割りと希望の金額を、１年間の助成金を頂くことができたので、長期休暇の子どもの居場所として、学習支援と、学習に来た子に食支援。直接、食に困っているお子さんにあげることはできないのですが、何かでつながっていけばいいなということで、それを北のほうで、北町学食ということで始めました。この旧駅舎のネットワークを生かしたいと思いまして、木村君に学習支援の紹介をしていただいて、一橋の学生さんに、木村さんもなのですが、今回この日程の中で来ていただくことになりまして、さらに、くにきたベーすの佐藤さんの、立東に昔、駄菓子屋さんがあったのですが、今は潰れてしまって、駄菓子屋さんがほしいねと話したら佐藤さんが行くよと言ってくれたので、８月２４日に佐藤さんが来て、駄菓子屋さんごと持ってきてくれるということになりました。
　この委員会の本当にいい影響を受けまして、活力になって、パパパッと団体を立ち上げたので、なるべく継続してやっていきたいと思います。お時間ありがとうございます。
○鈴木会長　すばらしい。宮﨑さん、ありがとうございます。それでは、外立さん、お願いします。

～事務局より「【資料2】前回会議の振返り及び今後の予定について」のとおり説明があった～

○鈴木会長　ありがとうございます。今も拍手が湧きそうな雰囲気がちょっとありましたが、僕の勘違いか分からないけれども。和田さんは、前、まちづくり会議のときに担当していただいていて、私も円形公園に入る実験とかをやっていたりしていて、今は道路の管理課に行かれて、これを実現してくださって。外立さんは、産業のほうから今これをやってくださっていて、市の中の連携がすばらしいなと思って伺っておりました。
　大事なことはいろいろあって、皆さん、今期で一旦任期は満了となりますが、もう２期分、円形公園、東西広場がオープンするときまで継続するという形のご提案を頂きまして、委員の方も可能な限りご継続をお願いしたいということですので、ぜひ皆さん、前向きにお考えいただければと思います。

ここまで何か皆さんからご質問とかございますでしょうか。

大丈夫そうですね。そうしたらですね、本日のメインイベントというとあれですけれども、資料でいうと「本日のグループワーク」というところに入ってまいりますが、実際に活動している方のお話を伺ってみようということになってまいります。

髙野さんと松川さん、冒頭にご紹介させていただきましたけれども、最初に、それぞれに５分から１０分程度と伺っていますけれども、どういう活動をされているかご紹介いただいて、それを聞いた後に個別に分かれて、もっと聞きたいことを根掘り葉掘り伺っていくというような時間にしたいと思います。最後に、それを踏まえて、また今年度どうしていこうかということまで意見交換できればと思っております。

それでは、まず髙野さんですかね。よろしくお願いいたします。

○髙野　髙野です。今日はお招きいただき、ありがとうございます。ここに書いてあるとおり、一橋大学に入学してから、まちづくりというかまちに関わるイベントを企画してきたのです。だから、もう十何年になるのですが、広島から出てきて、国立に引っ越してきて、すごくすてきなまちだなと思ってうろうろしていたら、いろいろな人と知り合いができて、もっと好きになって。もっとまちのことを知ってもらう機会、よそ者といえばよそ者なのですけれども、地域の方にこのまちの魅力をもっと伝えるにはどうしたらいいかなとちょっと真面目に考えて。真面目にというほどでもないのですけれども、面白いイベントをやっていこうと思って、それこそ今日の松川さんのイベントなどにも関わるかもしれないなと思うようなジャズフェスティバルとか。ジャズフェスティバルはまちの大学通りの中で、ちょっと空いたスペースでミュージシャンに演奏してもらったりとか、あとプロのミュージシャンに演奏してもらったりとか、それを同時多発的にやるというようなイベントを企画したりしていました。

それこそ市役所の皆さんだったり、商工会議所の皆さんだったりと一緒にコラボしてやったようなこともあったのです。そんなこんなで、何で結婚式を企画しようと思ったのかというのが気になると思うのですよね。いろいろ思い出していくと、大学を卒業してすぐくらいだと思うのです。結婚した彼女というか、今の妻なのですけれども、ある日とぼとぼ歩いていて、結婚式どうしようかみたいな話を振られたのです。結婚式の話をしてきた、いきなり振ってきて、「ゼクシィ買う？」みたいなことを言われて、どきっとして、「結婚は考えているけれどもね」みたいな話をしていたのですけど、まず結婚式の話から入ってきて、ゼクシィ買おうかみたいな話で、分厚いやつ、ご存じだと思うのですけれども、あれを買ったのです。

すごく重たくて、実際に重たいのですけれども。ちょっと重たいなと思ったのです。それは結婚が重たいというよりは、僕はイベントとかいろいろな企画をしていて、結婚式が大変そうだなと最初思ったのです。大変というのは、いろいろ頑張るのはいいのですが、結婚式場でやるとすごく仰々しいというか、知らないスタッフとかが来て、着の身着のまま、脱がされて、衣装を着させられてみたいなイメージがね。実際に僕はそこでやったわけではないので、実際は違うかもしれないですが、そういうイメージがあって、ちょっとやりたくないなと思ってしまったのです。

そのときに、でも、何かちょっとスイッチが入って、これを地域でやったら面白いのではないかなとぱっと思ったのです。知らない人にスタッフをやってもらうよりも、自分の知り合いに花束を作ってもらったりとか、音楽の演奏をしてもらったら楽しいかなとそのときにふっと思って、それでスイッチが入って、いろいろ考え出したのです。

プラスアルファで、セレモニーというのですかね。セレモニーは割りと個人的なというか家族的なイベントに現代はなっていると思うのですけれども、もうちょっと地域性のあるセレモニーにしたいなと思っていて。例えば卒業式とかは学校の中でやったりしますが、それも学校の中だけというイメージがあるではないですか。セレモニーを地域の中でやっていくと面白いのではないかなと。地域の中でできるセレモニーというのは、どんなセレモニーだろうというのを考え始めたのが１０年前ぐらいになりますかね。

それからいろいろあって、今はソーシャルワーカーなどをしながら、「街ｋａｄｏｄｅ（まちかどで）」というグループで、結婚式だけではなくてセレモニーの企画だったり、卒業式と併せて卒業式の日に駅舎で写真を撮ってあげますよとイベントをしてきたのです。それでちょっと、５分、１０分なので簡単にと思ったのですけれども、自分なりにセレモニーを作るときのポイントだなと思っていることがあって、最初イメージ動画みたいなものがあって、今回の結婚式の。ちょっと見られないと思うのですが、音だけちょっと聞いてください。

（動画再生）

○髙野　これは妻の声が入っているのですが、カメラマンさんが編集してくれて。これは私と妻が一緒に朗読をしているのですね。私たちがどういうふうに出会って、どういうことを国立でやってきたかという物語にして、それを結婚式で語るのです。私と妻が交互に語り合っていくような。

要はですね、これを事前に書いて、本を作って、２人で見ながら朗読しているのですけれども、ものすごく緊張しているのですね、僕も、妻のほうも。それを、１００人くらい、スタッフとか入れたら、外の人も含めたら１００人くらい聞いていたかもな。聴衆の皆さんだったり、参加者の皆さんが聞いてくれていて、シーンという感じで聞いてくれているのですよね。

それは、僕はうれしかったし、すごく新鮮な気持ちだったのですけれども、半分は企画者として狙っていた部分もあって、要するに一体となって１つの声に集中してもらうという場を作りたかったのです。つまり、セレモニーで大事なのは、いかに皆さんが緊張感を持って何かに集中できるか。場ができるかというところが、とても私としては重要だと思っていて、イベントは楽しいというところが強調される、どうやって楽しくするかというところが強調されるかと思うのですけれども、それもすごく大事だと思うのですけれども、楽しいという一方で、何か非日常だからこそちょっと緊張するいうか。

例えば小学生とかがピアノをすごく練習してきて、プレイピアノでやってきたときに、泣きながら上手くできないとか言ったら、みんな多分聞き入ってしまうではないですか。そういう緊張感が少し入ることによって、その光景だったり、そのイベントがとても参加者にとって特別なものになる。それをずっと覚えていてもらって、こういうことがあったねというのを語り継いでもらえるような形になるかなと、私としては思っているのです。なので、セレモニーを作っていく意味というのは、そうやって皆さんに特別な風景を記憶していってもらって、それを語り継いでいってもらったらうれしいなと。それが、ひいてはまちの活性化だったり、いろいろな人を巻き込んでいく力になっていくのかなと考えています。

多分もう５分、１０分たっていると思うので、一応こんな形でまとめさせていただきたいと思います。ありがとうございました。一応、当日のパンフレットをお配りさせてもらっています。ここに大体内容は書いています。すみません。内容の説明をあまりしていなかった。

○会長　ありがとうございます。皆さん、聞きたいことはたくさんあるのではないかと思うのですけ

れども、１つ２つ、今、何かあれば。
○礒部委員　大変、自らプロデュースしてということですごくいいなと思ったのですけれども、今のお話を聞いていて、旧国立駅舎が身近な存在なのだけれども憧れの場所になる、そんな感じで使っていければいいという１つの例だと思いました。実際にご自分でそういうふうにやってみて、もっとこうだったらほかの人もいろいろなことができるのになとか、今の時点で、もうちょっとこうしたらいいのではないかということがあれば、教えていただければ。
○髙野　結婚式に限らずということですよね。もう十分、私としてはすてきだなという感じがあるのですけれども、どうかな。ごめんなさい、ぱっと思い浮かばないですね。
○礒部委員　思いついたときに教えてください。
○髙野　はい。
○鈴木会長　ありがとうございました。では、後ほどまたグループに分かれたときにいろいろなお話を伺いたいと思いますので、松川さんのお話にいきたいと思います。お願いします。
○松川　皆さん、はじめまして。松川創と申します。私は、今日外立さんから自己紹介をするというので、ちょっとプレゼンみたいなものを作っていかなければいけないのかなと、ちょっと堅苦しいものを作ってしまったのですが、お目通しいただいて。
　まず私は、国立を出身としている、まだまだ駆け出しなのですが、指揮者をしている松川創と申します。２ページ目を開いていただいて。これが、よくチラシなどに載せているプロフィールなのですけれども、これはさり気なくお目通しいただいて、さらに次に行っていただければいいのですが。ありがとうございます。最初はこの「はじめまして松川創です」というページを見ていただければ。そして、１ページ目をめくっていただいて、これはもう形だけのものなのでその次を見ていただければいいかなと思うのです。よろしいでしょうか。
　私は、実は国立に住み始めたのは中学生の頃なのですけれども、国立の桐朋学園小学校、中学校、高校とずっと１２年間、桐朋に通っておりまして、本当に男子校生徒だったものですから、道を横に並んで歩いてしまったりとか、皆さんにご迷惑をおかけしながら学ばせていただいて、今まで生きております。その後、筑波大学の芸術専門学部の建築デザインというところに行って、音環境だったりとか、音と都市の関係について学びました。
　そのときの恩師というか、本当は大学院にまで行ったのですけれども、大学院に行くまでにもずっとオーケストラだったりとか吹奏楽団にすごく傾倒して、小さい頃から音楽教室等々には行っていたので、やはり音楽の道に、音環境をやればやるほど、その舞台のほうに立ちたいという思いが強くなってまいりまして、恩師に指揮者を目指したいのですけれどもというお話をしたところ、分かった、ただし音楽家というのはやはり狭い、狭いというかホールの中で閉じこもって音楽をすること、そういうイメージがないとは言えない。だから、こうやって都市環境だったり環境デザインを学んだお前は、都市に出て、外に出る音楽家を目指せ。それが条件だということを言っていただいて、それが今でも心の中に大切に残っているのです。その後、京都のほうで指揮を学びまして、その後、今は国立の実家に戻ってきまして、まだまだ指揮者としての修行を積みながら、まちづくりだったりとか、そういうことも気持ちの中にはありながら生きていると、そういう次第にございます。
　そして次のページをめくっていただきますと、筑波大学の卒業制作では、これでもう１つの冊子のほうも見ていただければいいのですけれども、これは土浦というまちで、その都市空間の中に、例えば高層建築が立ち並んでいるところ、そしてそのほかには家がたくさん立ち並んでいるところ。その

ほかには商店街とか、アーケードのある商店街とかいろいろなところがあると思うのですけど、その中に、一見都市空間としては３種類だけれども、それを音響的に見直すと、例えば超高層建築と高層建築の間は手を叩くと音が滞留したりとか、物すごくうるさい幹線道路から一本挟んで路地に入ると突然音が静かになったりとか、そういう経験が皆さんおありだと思うのです。都市を音楽だったり耳の面から見直すと、別のポテンシャルがあるのではないかなということを研究したというのが僕の研究で、そのときに、例えば一番最初ですと、高層建築と超高層建築の間だと、２秒間くらい実は音が残響するのですね。これは実はコンサートホールと同じ残響時間で、果たして雑音はあるのですが、そこにちょっとした設えをしてあげるだけで、実はやはりビルとビルの間というのは都市的にはデッドなスペースと思われがちなのですが、もしかしたらそこがオーケストラの演奏に適しているかもしれない。

では一方で、プランＢというものですけれども、これは商店街の中ですね。これは狭いところで、商店街の中という雑踏が多いところなのですけど、実際、音があまり響かないゆえに、小規模なアンサンブルに実は適した音響空間なのではないかと。プランＣは高架下なのですけれども、高架下というのも大体デッドなスペースとして見られがちで、大体公園とかになっているのですけれども、その公園に音は滞留するのですが、ブラスバンドだったりとか、逆に音には音をというか、すごく賑やかな音で、かつ高架下というのは実はしっかり音が跳ね返ってくるので、すごく聞きやすい環境になるのではないかと、そういうことを最初に経験してから、実は指揮者になろうと思ったのですね。

もう１枚めくっていただくと､今は指揮者としてどういうことをやっているかなみたいなことです。京都で学んだもので、京都だったり関西にご縁が多くて、京都市のジュニアオーケストラだったりとか、関西のオーケストラ、あとは名古屋のオーケストラ。セントラル愛知交響楽団というオーケストラだったりするところで、コンマスをさせていただいたりしました。

そしてもう１枚めくっていただくと、おととし、２０２０年の５月頃に国立に戻ってきたのですけれども、当時、高校生のときに国立駅舎がなくなって、それから国立の駅舎が再建されたというちょうどその辺りの時期に戻ってきて。その後、ムサシ楽器という、旭通りにあるピアノ屋さんで、ちょっとまだ指揮者として食っていけないので、いろいろ勉強させていただきながら雇っていただけませんかというので雇ってもらって、いろいろピアノを売るお手伝いをさせていただいている中で、国立駅舎にピアノを置くというお話が舞い込んできたときに、その担当になったのです。

そこで、シンメルというピアノが、実はドイツのブラウンシュヴァイクというまちで作られたピアノで、実はその日本総代理店をムサシ楽器が務めているのですけれども、とてもいい音色がするピアノで、そこのピアノをぜひ置いたほうがいいのではないかということを僕は提案させていただいて、実際にそれがいろいろ、ムサシ楽器のいろいろとか、ロータリークラブの皆さんの頑張りとか、いろいろなことがあって、そのピアノを置くことになったということなのです。なので、そのときに初めてヒシヌマさんとかともいろいろお話をさせていただいて、プレイピアノを使うに当たってのお話とか、いろいろご相談させていただいて、すごく懐かしいなという感じなのです。それから不思議なご縁がどんどんつながっていきまして、その後、「風景の足跡」というテレビ朝日の番組で旧国立駅舎が紹介されたときに、実はその５分番組でピアノを弾いていたりとか、そういうのもゴトウさんにご連絡頂いて、１週間後にピアノをテレビで弾かないかみたいな感じだったのですけれども。これは、ぜひさせていただきたいなと。

やはり僕は指揮者としてはすごく珍しい経歴というか、指揮者というか音楽家というのは、そもそ

も音楽大学にそもそも普通に入って音楽家になる人が多いのですけれども、私は一般大学に行ってから指揮者を目指したというちょっと不思議な経歴で、そこでやはり自分の中でも指揮を学ぶことと、その前に学んだ建築等とか、そういうことが不思議なことにこの１年、２年、この国立と携わらせていく中でどんどんどんどん融合していきまして、やはり音とまちづくりというのが自分の生涯のテーマなのだろうなということを今は気にしながら、しかし、そのためには指揮者としての実力もどんどん必要ですから、逆に言うと指揮者の実力が上がれば上がるほど、止めることも増えていくかなと思いながら今は修行しているのです。

そういう中で一番最後、この間、まちと音楽のつなぎ役としてというところですけれども、やはり国立というものに２０２０年に戻ってきてから、ムサシ楽器だったり、旧国立駅舎と携わらせていただいている中で、国立というのが本当の意味で音楽のまちである素養があるということを知ったのですよね。

小さな頃、それこそ高校の頃に、高校の地理の時間で、国立が実はゲッティンゲンというまちを模様していたと、これだけ覚えていたのです。その記憶だけあって、実はそのゲッティンゲンが、シンメルのブラウンシュヴァイクと同じニーダーザクセン州というドイツの州だったりだとか、もともと模倣していたまちからこのまちの区画が作られたということを考えると、実はゲッティンゲンにおける教会と旧国立駅舎というのが同じ意味合いを持っていて、もともと教会には必ずオルガンがあって、必ずそこを中心にまちが、音楽を中心に回っているということを顧みてここを見ると、国立というのが、国立の中心である旧国立駅舎にピアノが置かれて、そこを中心に音楽がそこから花開いていって、人がそこを中心に国立の音楽のまちになっていく、シンボルになっているかなというのをちょっと運命的に感じながら、きっとここから音楽をどんどんどんどん、もう一度国立を音楽のまちとして、一度は潰えてしまったそうなのですけれども、もう一度、こうやって国立に育てられた恩もありますし、この土壌は間違いなく音楽のまちになるのにふさわしいまちだなと思いますので、今後もいろいろなところで、いろいろな夢があるのですけれども、国立にきっとプロオーケストラを作りたいなと思ったりとか。そのオーケストラの演奏会を常にしながら、まち全体が、それは筑波大学で学んだことを生かして、まち全体が音響的な目線で見るとどんどんどんどんつなげていって、まち全体が１つの音楽のまちになっていくような、その俎上にできたらいいかなということを野望として夢見て、活動している、そういう人間です。今日はいきなり来させていただいてありがとうございました。いろいろとまた教えてください。ありがとうございます。

○鈴木会長　ありがとうございました。驚くようなお話がたくさんあって、物すごくワクワクする野望を語っていただきました。ありがとうございました。皆さん何か、この時点でお話、ご質問とか、ございますか。

○佐藤委員　すみません。ムジクニというのは一体何でしょうか。

○松川　これは資料集の中にいろいろ載せていた、最後のムジクニというのは、僕の夢というか、こういう活動ができたらいいなと思っていることの１つで、やはり僕だけでなく、音楽のまちという１つの言葉を言ったときに、この日本はそういう言葉が大好きで、この世の中、音楽のまちと自称しているまちはものすごくたくさんあると思うのです。しかしそれが本当に、何をもって音楽のまちと言っているかというのはすごく不思議なところがあって、例えば松本とか浜松とか、いろいろあるのですが、実際に音楽のまちたらしめる要因は何かなと自分の中で考えたときに、ドイツとかオーストリ

アとかの地方都市みたいな、そのまちには１つ歌劇場があって、その歌劇場に週末、お客様が集まる。その道中で、お客様がそこの商店だったりとか、道中の商店、交通機関だったり、そこのお食事屋さんとか、そういうところでお金を落としていく。つまり、その１つの演奏会をきっかけに、この演奏家、そこへ向かうお客様、そしてそのお客様から商いをしている周りの商店の皆様、その三者が音楽という演奏会１つだったりとか歌劇場を中心にコネクションがある、コネクトしている。そこである意味、言葉を選ばずに言えば経済が回っているとか、音楽を中心に経済が回っていることが、そのまちが音楽によって豊かになっていることの証明なのではないかなというのが僕の１つの答えで、それを実現するために何ができるかなと考えたのが、ムジクニというのを今は妄想しています。

演奏家と、その演奏を聞きたい観衆と、その演奏家の演奏会を行いたい人というか、商店だったりとか、多分それはいろいろな施設だとか分からないですけれども。その３つの、演奏したい、してほしい、そして楽しみたい、をつなげるプラットフォームをどうにか作れないかなと思って考えたのが、このムジクニなのです。なので、１つのホームページみたいな形でプラットフォームを１つ形成して、人と音楽家と演奏家と商店だったり、そういうところをつなげていくようなものをプロジェクトとしてやりたいなと思っている。その最初の最初の１枚ということです。

〇佐藤委員　すみません、さらに追加でよろしいでしょうか。音楽のまちというと、例えば近くだと府中では結構ジャズを押したりということで、１個音楽の中でジャンルを絞ってやっていて、立川などはそうではなくて、かなりごった煮というかそういう感じでやっているなという印象があるのですけれども、個人的には、絞ったほうがいいのか、あとは多ジャンルでごった煮でやったほうがいいのか、その辺りのところはどういうふうにお考えなのか聞きたいです。

〇松川　ありがとうございます。私は、それこそ今、国立駅舎にはピアノが置いてあると思うのですけれども、このピアノという楽器の最大のメリットはジャンルを問わないところにあると思うのですね。なので、この国立駅舎を中心とした音楽の発展にはジャンルを問わないよさを大切にしたほうがいいかなと思っています。

〇佐藤委員　ありがとうございます。

〇鈴木会長　ありがとうございました。この後、グループに分かれて話すということなのですけれども、グループに分かれるのももったいない気もすごくしてきてしまったな。洪さん、どうしましょうか。

〇洪委員　この後、皆さんにまだ質問があったら聞いて、いろいろ雑談ではないですが、聞いたりとか。オンラインの方もいるので、置いてきぼりにならない形がいいかなとは思うのですけれども。

〇鈴木会長　落合さん、藤田さん、置いてきぼりになっていないですか。

〇落合委員　ところどころちょっとオンラインだと聞きづらい部分もあると思うのですけど、大丈夫だと思います。

〇鈴木会長　何かお２人に聞きたいことはありますか。髙野さん、松川さん、あるいはお２に人。

〇落合委員　先ほど磯部さんからも質問があったのですが、駅舎の活用についての部分を、こうしたらいいとか、そういうアイデアを教えていただきたいなと思っています、お２人とも。

〇鈴木会長　髙野さん、何か思いつきましたか。

〇髙野　ちょっと椅子が重たいなと。もうちょっと動かせたらいいなと思いました。ごめんなさい、それぐらいです。

〇鈴木会長　真ん中にある丸いやつね。ありがとうございます。松川さんは。

○松川　私は、あの駅舎はすごく天井が、エッジがない天井をしていて、音響的にすごくすばらしい構造になっていると思うのです。全ての音が下に落ちてくる構造になっているので、もっともっと演奏会をしたりとか、あとは円形広場が、その前に広場になるというお話があったので、やはり反響できる板というか、後ろに反響板みたいなものがあったほうが、オーケストラの音がすごく映えるので、国立駅舎の前のひさしの部分を反響板に見立てて、あそこに管楽器とか弦楽器を並べて、円形広場側に演奏を届けるような、そういう演奏会をしたいです。あとオペラとか、そういうのもしていけたら、きっといいと思います。

○鈴木会長　ありがとうございます。髙野さん、お願いします。

○髙野　とてもすてきだと思っていて、僕も。雰囲気的にも。天井が高いとか、すごくいいなと思っているのですけれども、むしろ、すごくまだまだツルンとしたイメージなのですよね。駅舎の中だったり外だったりが。行政の方もすごく努力されて、きれいな状態を保っていると思うのですけれども、むしろ汚れていくというと言い方が悪いのですけれども、いろいろやったなという軌跡が見えるような、傷がついていく様子が、むしろ使っていく中で、こんなことがあったのかなと。例えばボコッとどこかへこんでいたとしたら、これはこのイベントのときにみんながぶつかってとか、例えば職員さんが説明してくれたりとか。それは極端かもしれないけれども、何かやってきた軌跡が見えるような形。使っていった結果、何か変化していくようなものが見えてくると、面白いのかなとは思いました。

○鈴木会長　年季が入っていくというかね。それはすごく、真っ白でまだきれいなのですよね。

　このまま質疑をどんどんやってしまったほうがいい気がするな。皆さん、どうですか。

○佐藤委員　めっちゃあります。

○鈴木会長　では、佐藤さん、もう一回。

○佐藤委員　すみません、俺ばかりしゃべっているのですけれども、松川さんに質問で、音を広げるのではなくて音を限定させる形で広場をデザインされたと思うのです。というのも、音を出すと周りのほうに迷惑みたいなのもあって、ここの間は音を出したいけれども、ここまでは音を届かせたくないみたいなこともあるのですが、そういったことは可能なのでしょうかと言ったら、すごく雑な質問なのですが。

○松川　実は外で音を出すということにおける最大のデメリットは、騒音問題なのですよね。今おっしゃったとおり。これの解決法は自分の中で２つあると思っていて、今おっしゃってくださったように、距離で何とかする。やはり音は距離の二乗に反比例して小さくなるらしいので、距離があればあるほど小さくなるのですよね。だからある意味、ここに音を届かせたくないという場所に遠ざけるプラス、そこに緩衝できる、ここで音が止まるであろうものを出す。ないしはブラスバンドとか大きいものはやめて、演奏側で何とかするパターン。

　２つ目にあるのは、これが最大の理想である難しいほうだと思うのですけれども、そういう環境を作る。それが許される環境を作るというのが２つ目の解決策だなと自分で思っていて、例えば今のプレイピアノとか、まさにそれがうまくいっていると思うのですけど、一日の２時間だけ、音が流れることが周知されている事実があると、周りの人は、そこで今プレイピアノデーだから鳴っているよね、というのができると思うのです。そんな感じで、駅舎のここで何時から何時までは、今日は演奏会があるのだよねということが恒例化していたりだとか、それこそ市民が、音楽というめっちゃ難しいところで、どれだけうまい演奏をしたとしても、それが嫌いだなと思った人には嫌いに聞こえてしまうというのが、音の非常に、音楽家が絶対に避けられない悩みだと思うのです。逆を言うと、子どもの

物すごくぐちゃぐちゃにもしピアノを叩いて弾いていたとしても、お母さんはそれを聞いて感動しているかもしれないし。つまり、市民の心がそういうことを許容できるような外側からのアプローチも大事かなと思いながら、ここはでも検討の余地が非常によくあるところだと思います。
○佐藤委員　ありがとうございます。
○礒部委員　髙野さんと松川さんのお話とか経験とかを聞いて思ったのは、具体的に今度、市民祭りに向けて、何かぶち上げてしまったほうがいいのではないかなと思うのですよね。サイズとか規模は別として、今までの経験とか夢とかも含めて、どんなサイズ、小さくたっていいから、せっかくあの円形公園のところに近づけるとかいう話もあるので、何か小さいけれどもやってしまうというのがいいのではないのかなと。それでデザインコンペに参加するような人たちにもそれを見てもらって、それで実際のコンペにつなげてもらうとか。もう具体的に何かやっていったほうが、市民の目にもじかに触れて、そんな使い方ができるのだというのを見てもらえるので。そんなことをやっていったほうがいいのかなと思って。そういうデザインも。もし許すならば、多分お金は出ないのでしょうけれども、毎回連絡会議に出てきていただいて、みんなと話をしていただくと、もっと面白いのではないかなと思います。
○鈴木会長　どうですか、髙野さん。
○髙野　私としては、結婚式をプロデュースできる場があるのなら、どこへでも行きます。どこでもやりたいですという感じです。それこそ、人が集まるような場所で、市民、市民の方でなくてもいいと思うのですけれども、国立で結婚式を挙げたいという方がいたら、みんなで応援しますよという感じのものができたら。

○松川　僕も本当に、国立で音楽に関して悩みがある人の助けができればどこでも行きたいし、そうやって生きていきたいと思います。
○鈴木会長　髙野さん、先ほどお時間も配慮していただいて、ちょっと遠慮されて話さなかったことがあるのではないかなと思ったりするのですけれども。これは最初、僕、時系列で伺って、ちょっと聞き逃したところもあったのでよく分からなくなってしまったのですけれども、１月に結婚式をしたときに結婚されたということでいいのですか。
○髙野　入籍自体は、それよりも前にしていました。
○鈴木会長　ずっと前。
○髙野　１年半くらい前。コロナとかでちょっと延期とかもあったりして。
○鈴木会長　ではゼクシィが重かったときより前から、まちの中でいろいろなことをやるというのは、やっていたということですね。
○髙野　そうです。
○鈴木会長　その延長で、コミュニティウエディングが面白いのではないかというので、まず自分でやってしまおうということだったのですね。ありがとうございます。そうすると今後の展開というか、１回目は旧駅舎で、ご自身でやりましたけれども、その次の企画があるのかどうかとか、どのくらい、どういうところでやっていこうとか、アイデアがあるのかとか、そういうお話がもしあれば、お聞きしたいです。
○髙野　これまでは、国立市内で畑の中で結婚式をやったりとか、あとは古民家でやったりとか、あと、今年の４月は矢川の公園、もう本当に矢川が流れているほとりの公園があるのですけれども、そ

こで結婚式を、もちろん別の方なのですけれども、企画させてもらったりしています。
　だから、とにかく基本的には公共施設だったりとか、コミュニティスペースと言われるような、地域の人が集まるような場所で、そこの空間の物語であったりとか、その地域性みたいなものを知ってもらいながらの結婚式を開いていきたいと思っています。
○鈴木会長　何件やったのですか。
○髙野　１年に１回くらいのペースでやっています。
○鈴木会長　ということは、ご自身がやったのは１回目というわけではない。
○髙野　ではないですね。３回目ぐらい。
○鈴木会長　そうなのだ。すみません、全然分からなかった。
○髙野　そこの説明が全くなくて、コミュニティウエディングと呼んで始めたのは今年からなのですけれども、要するに誰でも参加していいよという形でできたのは、このコミュニティウエディングが、駅舎での結婚式が初めてだったのですね。それまでは地域の場所を借りて、友人だとか知人だとかがメインで、でも地域の方がスタッフとして手伝ってくれるよという式だとか、パーティーを企画していました。
○鈴木会長　ありがとうございました。よく分かりました。ほか、ご質問があれば、どんどんお願いします。
○中村委員　プレイピアノの駅舎の雰囲気が好きで、仕事でなかなか弾いているときに行けることは少ないのですけれども、やはり集っている人もいれば、ただそこにいて聞いている人もいて、あるいはすごく曲になってないのを弾いている人がいたりとか、すごくランダムな調子になっているけれども誰かがいるという、聞いているようで聞いていないようでみたいな雰囲気がすごく好きなのですけれども、あれを外へ展開して、広場が整備されていくときに、やはり先ほどもあった騒音問題という話も出てくると思うのですよね。
　さっきひさしを反射板にしてという話はすごく新鮮で、今まで円形公園からこちらに届けるという発想はあったのですけれども、そうすると多分、音が届かないよなと思っていたのが、そういう逆の発想もあるのだなと思ったのです。あの雰囲気を外に展開していくときに、注意点とか、こうやったらうまくいくとか、もしあったら教えてもらいたいなと思うのです。
○松川　ありがとうございます。まずは、実は先ほどお話ししそびれたなと思っていた一番大きなカテゴリーの話は、国立ピアノデーというのをやりましたという話なのですけれども、今年の３月の末に国立ピアノデーというイベントで、僕は演奏家のプロジェクションというか、演奏家を集めていく仕事プラス、音楽側を全部やったのですけれども、これは先ほど言った三位一体の、つまり商店会の方と一緒にやったので、商店会と演奏家と市民が一緒になってやるお祭りみたいな形だったのですね。
　でも、このときにやはり僕は、外で音を鳴らすことの最大のデメリットのところをすごく気にしていて、このときにしたのは、その範疇のマンションだったり住民の方には、１週間前と、さらにもう２週間前にも、この日に、この時間に音が鳴りますという、すみませんという一文というかお手紙を入れたのですね。ポスティングという形で。実際に国立ピアノデーのときは、そのおかげだからか分からないですけれども、苦情はなかったのですね。
　ただ、昔、プレイミーアイムユアーズというイベント、国立にいろいろなピアノをたくさん置きまくるというイベントをやっていたときがあったそうなのですけれども、そのときにはやはり２週間置きっ放しにしていたときに苦情が入ってしまって、途中でピアノを取り上げることになってしまった

とか、そういうお話も聞いていたのですね。だから、何よりもまず大事なのは、音が鳴るとか、そこが音楽によって音として出るということを周知するということですよね。間違いなく、絶対に、何よりも重要なのはそこかもしれませんね。もう本当に外で音を出すときの。もしかしたら音楽家は逆のことを言うかもしれないのですけれども、僕はそう思います。やはりそれはすごく重要で、音楽を届けるときにも心の準備が必要だと思います。

なので、まずはそれが大事だなと思うことと、これは誇大妄想みたいな話なのですけれども、これは外立さんと、この間お話しさせていただいたのですが、物すごく現実的な話で、例えば結論から言うと、弦楽器とか、あとはオーボエとかの木管楽器。これは直射日光がきついという問題があって、プロフェッショナルの人たちはとてつもない額のものを持っていたりするので、野外で演奏をするのは難しいのです。なので、海外の演奏会とかですと、野外ステージには絶対に屋根があったりとか。これは誇大妄想だったのですけれども、プランＡの僕の最初の提案のときには、これは高層ビルと高層ビルの間に反響版ないしはそれに似たようなものを吊るすというのが僕のアイデアだったのですけれども、ここまでいかなくとも、もし円形広場の上に何か直射日光を防げる何かがもし設置などできたら、音響プラスそういう紫外線の意味でも一番いいけれども、それは難しいかもなと思っています。

そんなことをやっている海外もあったりするのですけれども、それはもう非常に珍しいパターンです。昔は旭通りを行ったところに野外音楽堂があったそうなのですけれども、それがなくなってしまっている今、円形広場でやるときには、例えば夜にやるなら大丈夫かもしれないとか、そういう解決策だったりもします。なので、現実的な問題だと、音の騒音問題に関しての市民への理解と紫外線問題というのは、ブラスバンドだったら関係ないし、ジャズとかそういう、もしかしたら金属楽器バンドとかだったら関係ないとおっしゃるかもしれないです。といった感じです。ありがとうございます。

○鈴木会長　ほかにございますでしょうか。秋田さん。

○秋田委員　髙野さんに質問なのですけれども、まちかどの結婚式、私のところもコミュニティフラワーの受け取り側で参加させていただいたのですけど、たまたまお店に来られていたお客さんが見ていらっしゃって、なになに、みたいな。すごいね、みたいな。最後笑顔で拍手して、感激されていたりして、すごく雰囲気のいいイベントだったかなと思っています。ただ、これをやる中で、花を贈るとか、街場を歩く中で、遅れて来て申し訳ないです。先に聞かれていたことだったら恐縮なのですけれども、苦労されたこととか、よりこういう工夫が必要だなと思ったことがあったら、教えていただきたいです。

○髙野　ありがとうございます。いいところを聞いていただいたなと思って。コミュニティフラワーの説明を全然できていなかったので、ぜひここでさせていただけたらうれしいなと思って。この結婚式の中で、結婚式で使ったお花をまちの人に配りたいと思ったのです。これからもよろしくお願いしますみたいな気持ちで配ろうということになりまして、結婚式の、駅舎の中で祭壇みたいなものを作って、お花をたくさん並べて飾ったのですね。それを結婚式が終わった後に友達に持ってもらって、みんなで、昔でいうと花嫁行列みたいな感じでいいのかな。みんなで大学通りまで歩いていって、まちの商店の方々にプレゼントして、プレゼントするので好きに飾ってくださいみたいな感じでお渡ししていったのです。それで１つお渡しさせてもらって、５、６店舗くらいですかね。大学通りをぐるっと回って、富士見通りのほうを回って、富士見通りの、あるお店で少しパーティーみたいなことをやったので、そこをゴールにして、ぐるっとみんなで回ったのです。それをコミュニティフラワーと名づけて、そういう企画もちょっとやってみたのです。

苦労という苦労は、そもそも飾るお花は、友達とか地域の方からご寄附いただいて買ったのですね。お花はそもそも。だから、飾るお花がそもそも集まるかなという不安はあったのです。でも、集まった後は、それを順番に、ふだんお世話になっているお店に事前に声をかけて回っていっただけなので、その辺は、事務的なというか下準備は大変な部分もあって、その辺は佐藤さんが一緒にやってすごく頑張ってくれたところなので、どちらかというと佐藤さんが大変だった部分かと思うのですけれども。大変だったところは、いきなり花嫁行列が始まったので、まち行く人は何が起こっているのか分からないと思うのですよね。結婚式の衣装を着た２人が歩いているということしか伝わらなかったと思うので、その辺りが、まち行く人にもうちょっと「今日結婚しました」というのが伝わるような工夫ができたらよかったかなとは思います。

佐藤さん、何かありますか。一緒に企画した佐藤さん。その辺。

○佐藤委員　佐藤です。髙野くんと一緒にこれを企画していたという経緯があります。花を配るのは、お店にお届けするのと、あと一般の方などにもお花を一輪ずつ配ったのです。髙野くんは花に結構こだわりがあって、まちを花で彩るというところがあって配ったのですけれども、来てくださった方に配るというよりも、かなり散発的にというか、そういう感じに配ることになってしまったので、その辺りをぎゅっとまとめるとか、まとめて配った後で、それを何か写真に残すなり、もうちょっと配り方なり何なりの演出的なところを考えたほうがよかったかなという気もしつつ、まちの中の人とやるので、そんなところはコントロールできなかったのかなという気もしつつなので、第１回目としては、こんなものかなという感じでした。

○鈴木会長　ゲリラ的に練り歩いたということですよね。すごく楽しそうですよね。それも恒例になってくるとまちの方も、また来てくれたみたいな感じでやりやすくなってくるのかなと思ったりしていました。

髙野さんと松川さんは初めてですか。お２人とも活躍しているから、どこかでお会いしている可能性もあるかなと思ったのですが、何かお互いにお聞きになりたいこととかが、もしあれば。

○松川　僕、ジャズフェスタをされたというお話がすごく楽しそうだなと思ったし、しかもまちの中で音楽をやるというところにおいて、それはすごくやってみたいなと思ったことですし、それがコミュニティにおいてすごく大事なことだなと思うので、そのお話だけちょっと伺いたいなと思います。

○髙野　単純に、音楽が流れているのは楽しい話だなと思ってしまうのですけれども、さっきも騒音の話とかありましたけど、それぞれ市民の皆さんも好きな音楽、嫌いな音楽が多々あって、どういう音楽を出すかというのはすごく難しい話だなと思いますよね。ジャズフェスといったのでジャズに絞ってはいたのですけれども、ここまでやると区切るのは難しいではないですか。だからやはりジャンルはどんどん広がっていって、いろいろなジャンルの人が結果的には演奏していて、もちろんイベント自体は盛り上がったし、楽しんでくれるお客さんはいたと思うのですけれども、それがやはり嫌な思いをしている人もいるかもしれないし、実際のところ、どこまで受け入れられたのかというところは、とても不安を感じながら、学生の身分でやっていて、先輩たちも含めて何年か、５、６年くらいかやっていたのですけれども、引き継いでくれる後輩がいなくなってしまってできなくなってしまったのですが。やはりどこまでまちの皆さんに受け入れられているのかなというのは、最後まで分からなかったところはあります。

○松川　まさしく今おっしゃってくださったことというのは、音楽をやっていく上で一番不安なところだと思うのです。今のお話で思い出したというか、やはり音楽のまちにするという文言というのは

掲げれば掲げるほど怖い。こういう場でしかあまり言いたくないやつなのですけれども、何でかというと、言葉が独り歩きしやすい言葉なので。さっき言ったみたいに、ヨーロッパのドイツの片田舎のまちが音楽のまちです。私たちみたいなのは言ってないのですよね。だから、呼称しなくても市民の人たちがそれを大切にしていてという、口で言うよりも実質そうなっているという未来を目指したいなと思う中で、今、おっしゃったお話みたいなのは、逆向きに市民の側からそれをやってほしいと思っていただけるような仕組みができたらいいなと思っていました。ありがとうございます。

○髙野　今、話を聞きながら思ったのは、すごく大雑把な言い方なのですが、演奏している人だったり企画している人だったりの、まちに対する愛みたいなのが何かしら伝われば納得してもらえるというか、喜んでもらえるのではないかなと思って、やはり自分が結婚式とかセレモニーを企画するときも、このまちのことを知ってもらいたいとか、このまちで暮らしていきたいですみたいな、熱量みたいな、なるべく伝わるようには工夫したつもりなのです。

○松川　すごくいいと思います。僕自身、国立市出身だったというのもありますし、それこそ結婚式というのも、この後、国立に住みますという、前も住んでいたのかもしれないですけれども、国立に若い夫婦がおりますということを証明することによって、すごくそれをサポートする人も出てくるかもしれないし、国立自身、すごい、音楽の世界に、国立市に住んでいますという人、すごくいっぱいいるのですよね、今でも。もともと国立は音楽のまちにしようと、最初、箱根土地株式会社が音楽家たちが住まうまちを作ろうとしていて、新宿とかの人がこちらに来たという話があります。これは別に音楽家に限らず、多分今のコミュニティという意味では、結婚式とかそういうことが身近に感じられるという意味では、芸術家とかそういう表現をする人たちが住みよいまちになっているのだなと、それはすごく大事なことだとは思いますし、面白いなと思います。

○髙野　私のほうからの質問もオーケーですか。私はどちらかというと、いろいろな要素を盛りたがる性格というか、結婚式もファッションだったり音楽だったり、食事は今回なかったのですが、お花だったり、見た目ですよね。そういうものをいろいろ組み込んだ結果の結婚式という意味もあるのですが、例えば松川さんで言うと、あえて音楽に特化されている部分もあると思うのですが、音楽以外に今、考えていらっしゃるイベントにプラスの要素を入れるとしたら、どんな要素があるといいなと思いますか。食とか、いろいろあるかもしれないけれども。

○松川　まさに今おっしゃってくださったようなところで、僕はもう音楽が好きで生きているので、音楽中心になってしまいがちなのですけれども、逆に言うと、何にでも合うと思っているのですよね。ベートーベンだってコーヒーの歌を作ったり、それこそジャズはバーから発展したとか、もちろん今おっしゃってくださったように食と切っても切り離せないものには間違いない。酒と女と、みたいなの、ありますよね。とかも、もちろんそうですし、そうではなくても、例えば何でも関係してくると思うのです。

　商店の、全然関係ない金物屋さんとかでも、今パッと思いついただけですが、金物屋さんでも例えばブラスバンドと組み合わせられるし、別にお花屋さんでも、お花のことを歌ったアリアなんてめちゃくちゃいっぱいありますし、音楽はどんなものでも一緒にいられると思うのです。逆に言うともっとミニマムな形で、「私、お花屋さんだから、何日に演奏会したいんだよね」みたいなことを音楽家の人とつなげて、お花に合う演奏会をそこでするので、というのが、例えば市民の人たちにうまく伝わる仕組みがあれば、お花屋さんはお花屋さんで演奏会をしてもらって、演奏家は演奏の機会があって、音楽を聞きたい人はお花屋さんで音楽を聞けるみたいなね。そういう小さなところから、どんどんど

んどんつながっていって、全然国立駅舎の近くだけではなくて、国立市の全体でそういうことができたら一番いいなと思っています。
○鈴木会長　ありがとうございます。どんどん盛り上がってきてしまった。藤田さん、何か聞きたいことはありますか。
○藤田委員　ちょうど聞き取れないところがありつつなのですけれども、髙野さんに聞いてみたいことがあって、これまでいろいろなところで結婚式を企画されてきたと思うのですけれども、畑だったり古民家だったり、さっき矢川のほうの公園だったりという話だったのですけど、駅舎でコミュニティウエディングをされていて、駅舎の空間ならではの、こういうところがよかったなとか、その空間の特徴みたいなのがあれば、伺ってみたいです。
○髙野　広さ的には広すぎず狭すぎずという、ちょうどいい人数が入るキャパシティ。結婚式ということに限れば、そんな感じがしました。うまく言葉では言えないのですけれども。コロナの対策もあって、中の広間に入れる人は制限させてもらったのです。３０人くらいだったと思うのですけれども、その人数も結果的にはちょうどよかったのかな。もっとコロナ関係なくぎゅうぎゅうになってみんなで話を聞いてもらうというのもいいと思うし、ぎゅっとなるのに、ちょうどいいスペースだなとは思いました。
　あとは、先ほど言った、天井が高くて、上から光が差すような雰囲気だったりとか、あとは後ろに、南側に祭壇を作って私たちカップルが座っていたのですけど、お客さんから見ると、大学通りがふわっと見えるような会場の作り方になっているのですよね。イメージできますかね。それもあえてちょっと狙った部分はあるのですけれども、これから何か始まりますよという雰囲気を演出できたと思うし、まちの起点というのですかね。ある意味、始まりというか、中心的な場所で、人が集まる場所で企画ができて、ちょっと結婚式はゴールみたいなイメージがありますけれども、ゴールではなくて、これからスタートなのだよというメッセージを伝えるのにはとてもいい立地というか、雰囲気も含めて、よかったなと思います。
○藤田委員　ありがとうございます。
○鈴木会長　ありがとうございました。最後に、今日、連絡会の皆さんはお２人とお話をして、やりたいことが出てきたのではないかと思うので、やりたいことでなくてもいいのですけれども、お１人ずつに今日の感想を一言ずつ頂いて、終わりにしたいかなと思います。よろしいですかね。木村さんから行きますか。
○木村委員
　高野さんにお聞きしたかったのは、ウエディング以外にも、卒業式だったりとか成人式というところの演出もされているというお話で、卒業式というところで言うと、自分も来年卒業なので、一橋大の卒業式があるのですけれども、どうしても大学の卒業式というのは味気ないイメージがあるというか、小学校とか高校とかの卒業式に比べると、学位記をもらって、大学で友達とだべって終わりみたいな。僕もちょっと留学に行ったりとか、就活をさぼっていて１年遅らせているので、今年、友達の卒業式とかに行ったのですけれども、あまりいいイメージがなかったので、卒業式でうまくウエディングと同じように、地域性を絡めた仕掛けができると面白いなと思っていたので、これまでにそういうことがあったのかなという話をちょっと聞きたいなと思っていました。
　続けてお話ししてしまうのですが、松川さんにお聞きしたかった話としては、先ほど、音楽のまちといってもたくさんあるというお話があったと思っていて、自分もそうかなと思っていて、先ほどド

イツであったりとか、オーストリアのまちも音楽のまちというお話があったのですけれども、自分が行ったところでいうと、アメリカのテキサス州のオースティンというところに行ったことがあって、そこも音楽のまちと言っていたのですけど、そこはヨーロッパ的な音楽のまちではなくて、大きな歌劇場があって、それを起点にしたネットワークというよりは、ダウンタウンを中心に小さいクラブハウス、小さい箱が幾つも集合して、隠れ家的な音楽スポットが幾つも集合していて、まちの外側には音楽は出ていないけれども、小さいスポットの中に隠れ家的に音楽スポットが幾つもあるみたいなイメージで。それもそれで隠れ家的なクラブハウスみたいなところでやる、ちょっとアンダーグラウンドな音楽みたいなところで、自分はすごく好き、それも１つの音楽のまちの形なのかなと思ったのですけど、国立の地域の特色とか、市民性みたいなところを踏まえた音楽のまちづくりというところが大事なのかなと思ったので、そこで国立の地域的な特色であったりとか、市民性を踏まえて、どういう音楽のまちづくりというところを考えられているのかなというところをお聞きしたかったところではありました。

〇鈴木会長　ありがとうございました。とてもいいポイントのことだと思います。後で、ぜひこの後お時間あればお二人とお話ししてみてください。それでは続いて宮﨑さんお願いします。

〇宮﨑委員　これから、もしやるとしたらということで、今の、本当に音楽が私もすごく印象に残っていて、高架下でオーケストラはすごく、高架下あるよね、空き地あるよねと思ったので、そういうのをうまくできたらいいなと思ったのと、駅舎は、お２人のイベントのお話を聞いていて、私もイベントを企画するときに、雨のことを考えていたのです。雨だとできないなというときに、駅舎はいいなと思ってしまいました。雨でもできるし、晴れればラッキーだし、晴れなくてもここの場所があるということで、どちらでも対応できるというところで、駅舎をもっとうまくイベントで、そういう利点を生かしたこともいいのかなと思いました。私は今後絶対ゴミ拾いをやりたいです、皆さんと。以上です。

〇秋田委員　今日、お２人のお話を聞けてとてもよかったです。ありがとうございました。イベントに対する情熱とか、まちに対しての思いというのがすごく伝わってきて、我々もこれからイベントをしていく上ですごく参考になりましたし、これからもいろいろなアドバイスを頂きたいと思いました。どうもありがとうございます。

〇洪委員　ありがとうございました。いろいろなお話を聞けてよかったです。私、前回参加していなかったこともあって、経緯だったりとかも含めてお話をお伺いできたのでよかったなと思っています。やりたいことということなのですけれども、ちょっと感想になってしまうのですけど、お２人のお話を聞いたところでもあるのですが。聞いていけばいくほど、私自身は何か特定のことがしたいというよりかは、聞いていて、資料を見たりしていたのですけれども、外の人から「そんなことできる？」とか言われるようなことが起きてもいいなとか、若い世代の人たちが何かやれる場所になればいいというのが、もともとこんな場所になればいいなというのが出ていて、それを実際にされている感じがすごくしていて、それができているのは、やはり旧国立駅舎の方たちが、いろいろな難しさもある中で一緒に協力してやろうという体制でもあるなと思ったりしていたのですね。

　そういった中で、こういうまちというか、誰かにとってこういうまちみたいな、松川さんにとっては音楽のまちだったりとか、髙野さんにとっては門出を祝えるまちみたいな。それをやることで、もしかしたら同じように思う人もいるかもしれないですし、また別の側面で見ているみたいな、いろいろなまちの形があってもいいなと思っていて、そう思ったときに、私はいなかったのであれなのです

けれども、１回目の振り返りをされている中で、使われていない時間とか、活動があまりないジャンルだったりとか、どういうものがあるのかまだ知らないので、そういうのを聞いたりしながら、そういうところにどうアプローチしたらいいかだったりとか。

あと、私もそうなのですが、やってしまうタイプの人間と、思ってはいてもなかなかやり方というのかどうすればいいか分からないという人もやはりすごくいると思うのですよね。なので、そういった人が一歩を踏み出すみたいな、一緒にやれる方法を考えるかみたいな、分からないですけれども、そういうのを実は駅舎のところでみんなで本を読みたかったでもいいですし、道路のところでピクニックしたかったでもいいですけど、そういうすごく小さな声を拾うことをできたらいいなと、お２人のお話を聞いて。それが市民祭りでできるとは思わないですけれども、そういう小さなことができるといいなと思いました。

○佐藤　ありがとうございました。２つあって、１個が、結婚式をやったときに、やはり周りの人が受け入れてくれるというのが、温かい感じであったのですね。音楽というより音を出すというのとうまく絡めていって、受け入れる心ができている場でどんどん音を出していくということを重ねていくと、そうするとゴールに近づくのかなと思ったのが１個。もう１個は音楽のまちというので、自分は国分寺市、国立の北口に住んでいるのですけれども、国分寺市も音楽のまちとして目指していこうみたいな話もあり、立川でもあり、というところもあって、何も差別化をすればいいというわけではないし、競う必要もないと思うのですけど、最初の立ち上げの段階で言うと、１個絞ってという方が尖って、特色があって面白いのかなと感じたりもしました。以上です。

○中村委員　今日、髙野さんのお話を伺って、自分の結婚したときを思い出して、とある重要文化財施設で式をやったのですけれども、何でそこでやったかというと、重要文化財なのでなくなることがないだろうと。結婚式場と違って、いつでも行けるだろうというところがあってそこを選んだのです。お話を聞いていて、メモリアルで使うところで国立駅を使うと、そこへいつでも行けるというところで、思い出し、スタートラインに立てるというところで活用があるのかなというところを思い出させていただいたところがあって。あとは松川さんのお話を伺っていて、国立市は、音楽として売り出すには、ある程度バックボーンがあるところなので、そこをうまく使っていけばいいのかな、なんていうところは思っているのです。ただ、やはり国立音大さんがあったときから騒音問題というのは常にあるというところがあるので、そこら辺をどううまく市民の人と折り合いをつけていくのかなというところを考慮しなければいけないなというのを感じたのと、あと１つ言っておきたいのは、市民祭りの活用は、今まで大学通りはあると思うのですけれども、駅前広場までやったことはないですね。

○―事務局　ないですね。今回が初めてやろうとしていることです。。

○中村委員　そうですね。多分市民まつりが初だと思うので、もし実現するなら大々的に市報の一面でばーんと売り出して、ぜひやっていただきたいなと。すごくこれすばらしいなと思って感動しました。ありがとうございます。

○礒部委員　どうもありがとうございました。先ほど言ったので、あまりないのですけれども、まさに第１回目でやったキーワードになっている、つなげるというのは、まずは市役所の方にこのお２方とつないでいただいたことがすごくよかったなということと、これでまた新たなつながりができればいいなと思いました。お２方の一橋大だったり桐朋だったりということで、昔から根づいているので、そういったネットワークとか、つながりなども活用しながら、あとは若い人もそうなのだけれども、高齢者も多いまちなので、その辺もつないでいただけるようなことになれば、もっともっといい展開

があるのではないかなと思って、夢が広がったような気がしました。ありがとうございました。
○鈴木会長　落合さん、お願いします。
○落合委員　髙野くんのウエディングについては、事前にこういうことをやるよというお話を聞いていたり、あとはうちの小鳥書房のスタッフがムービーを撮っていたりしたので、そのムービーをＹｏｕＴｕｂｅで配信していたのを、小鳥書房の本屋で営業しながら流させてもらってパブリックビューイングをしたりしたのです。そうしたら谷保のお客さんが今、駅舎でこんなことやっているんだとみんな見てくれたりして、私は駆けつけることはできなかったのですけれども、そうやって谷保の人と駅舎、または髙野くんたちと谷保の人をつなぐことができたかなと思いました。松川さんの音楽イベントも、もしＹｏｕＴｕｂｅで配信とかするようだったら、そういうこともやってみたいなと思いました。あとは、駅舎の活用で、私がここを知りたいなと思ったのが、詩の朗読をするポエトリーリーディングをやってみたいなと思っていて、音楽の生演奏で詩人さんが朗読をするというイベントをやってみたいなと、今日お話を聞いて思いました。ありがとうございました。
○鈴木会長　ありがとうございました。藤田さん、お願いします。
○藤田委員　今日、すごく楽しくお話を聞かせてもらいました。いつもヒシヌマさんからの報告で、いろいろな駅舎を使った活動のことを聞いているのですけれども、実際に運営連絡会以外の方々で使われた方の話を聞けたのはすごくよかったと思いますし、松川さんと髙野さんがつながるような、使った人たちがつながって、また意見を交換して、こんなことができるよねという話ができたのは、すごくいいのではないかなと思っています。もうちょっとコロナが収まってきて、交流会みたいな、同窓会ではないけれども、使った人たちが集まる場があると、それも面白いなと思ったりもしました。あと、髙野さんのコミュニティウエディングの動画を画面越しにですが拝見して、いい会だっただろうなというのはすごく感じつつ、僕も駆けつけられなかったので、もったいなかったなと思いつつ、改めて、おめでとうございますという感じです。
○鈴木会長　ありがとうございます。私の番になってしまったような気がするのですけれども、まずはお２人、本当にお話ありがとうございました。藤田さんがおっしゃったばかりなのですけど、お２人がお話をお互いにしてくださっているところが、すごく熱がこもっていてよかったなと思ったので、こういう会をやるというのが、きっといろいろなところに火を、お２人の話を聞いただけで火がついた委員の方々がたくさんいたと思うのです。まちで活動している方々同士が火をつけ合うということを、この連絡会がきっかけを作るということ、あるいは駅舎がそういうきっかけを作ることになっていくといいのかなということを一番思いました。
　あとは、つたないアイデアなので言わないでおこうかなと思ったりしたのですけれども、結婚式だけだとあれだし、結婚式は豪勢にやりたい人もいるかもしれないので、結婚何周年みたいなのとか、銀婚式、金婚式みたいなことをしていくと、年配の高齢の方というのがありしましたけれども、可能性が広がったりするのかなとちょっと思ったりしました。
　というわけで、以上ですが最後、すみません、長いのですが、せっかくですのでお２人にも一言ずつご感想を頂いて最後にしたいと思います。では、松川さんからお願いします。
○松川　今日は本当にありがとうございました。本当に３年前からヒシヌマさんといろいろお話をさせていただいて、いろいろなご縁がここまでつないで、まさかこんな会に出席させていただけるとは、僕はすごく光栄でした。この生まれ育ったまち、国立がもっともっと、本当の意味で、さっきいろいろなところに音楽のまちはあるというお話がありましたけれども、事実になっていくような側で、む

しろちょっと口ではあまり言わないぐらいの方向でなっていくような、もっともっと、これからもいろいろなことをやっていきたいなと思いました。皆さんのいろいろなアイデアを頂けて、今後もよろしくお願いいたしますと、そういった気持ちです。光栄でした。ありがとうございます。

○髙野　そうですね。それこそお葬式ぐらいまで全部やってしまってもいいかなと。本当に極端なことを言うと。ゆりかごから墓場までではないですけれども、それを地域の人がずっと見守ってくれる社会というのは本当にすてきだなと思うのです。イベントをやる難しさというのは、いくら音楽をやっても嫌いな人がいるかもしれないとか、常にそういう。結婚式をやっていても、もしかしたら結婚式なんてやっているんじゃねえよ、みたいな声が上がってくるかなという不安とか、もちろんあったりしたのですけれどもね。

　だけれどもチームだったり、一緒にやる仲間がいるからこそ乗り越えられる部分もあるというか。何かをやっていくときに、できるだけチームというか、１人だけではなくて、いろいろな人を巻き込みながらやることで、そういう不安も抑えられると思うし。いろいろ、今日、つながりという話もありましたが、つながりの中でいろいろ検討しながら、切磋琢磨しながら出た内容というのは、それはさっき愛という話がありましたけれども、熱として市民の皆さんに伝わっていくと思うので、こういう会を通して、今後もいい企画が生まれていくことを期待したいと思います。ありがとうございました。

○鈴木会長　以上になっていますが、外立さん、次回、どのくらいにやりましょうか。この１１月のやつが、やはり皆さん気になると思うので、それに手遅れにならないときにもう一回集まって、というのがいいのかなと思ったりしましたけれども。

○事務局　分かりました。髙野さんと松川さん、本当にありがとうございました。今日の話を踏まえまして、あと、連絡会としては２回あります。その間にワダのほうから話がありました市民祭りが１１月６日にあるので、その手前で本来なら１０月頃と思っていたのですが、ちょっともう一度、磯部委員のほうからもいろいろなお話もありましたし、今日の話を聞いて、もしかしたら何か次に、社会実験のときに何かできる要素があるかもしれないので、日程のほうをまた改めて委員の皆様に通知して進めていきたいと思います。

○鈴木会長　ありがとうございます。その辺は相談しましょう。もし９月にやってしまうと、もしかして菱沼さんがまたいらっしゃるのかなと思ったりしたのだけれども、できない感じもありますので、今日は先ほどご挨拶も頂きましたので、今まで菱沼さんのやってくださってきたことに感謝して、もう一度皆さんから盛大な拍手をお願いいたします。本当にありがとうございます。

　すみません、１５分過ぎてしまいましたけれども、今回はこれで終わりとしたいと思います。本当にありがとうございました。

―― 了 ――